

日韓発掘調査交流に参加して

奈良文化財研究所は、「日本国独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所と大韓民国国立文化財研究所の研究交流協約書」に基づく大韓民国国立慶州文化財研究所との「発掘調査交流合意書」により、1年ごとに約2ヶ月間、互いの発掘現場に研究員を派遣して、共同発掘調査を続けています。2011年8月24日から10月21日までの日程で渡韓しました。

今年度の発掘調査交流では、馬甲の出土などで有名なチョクセム古墳と、条坊の発見などが続き、注目が集まる新羅王京遺跡の発掘調査に参加しました。これらの遺跡がある慶州では、皇龍寺や雁鴨池など多くの有名な遺跡が集中しており、観光資源としての開発と大規模な発掘調査がめまぐるしい勢いで進んでいます。

発掘現場では、学芸士やそれを補佐する大学院生らと協力し合い、時に発掘の進め方や遺構の解釈などについて議論しながら、調査を進めることができました。両研究所の様々な人が、毎年定期的にこうした共同作業や議論を積み重ねながら、時に近づき、時に互いの違いを認識しつつ、交流を重ねていくことが、真の国際交流につながるものと信じます。

また、古都慶州の雰囲気を感じただけでなく、韓国の文化財研究所やそこで活躍する方々を取りまく環境を具体的に知ることができたのは、奈文研としての日韓交流を進めていく上でも大きな財産になりました。受け入れ先の国立慶州文化財研究所の方々はもちろんのこと、このような機会を準備して下さった全ての方々に感謝します。

(都城発掘調査部 庄田 慎矢)



チョクセム古墳での発掘の様子

奈良文化財研究所の発掘現場に参加して

大韓民国国立慶州文化財研究所と奈良文化財研究所は、2006年以来、発掘調査交流を続けています。今回は、慶州から7人目の奈文研への派遣となりました。滞在中には、2ヶ所の発掘に参加しました。発掘調査においては、個人の調査能力も重要ですが、研究員と作業員との意思疎通が何よりも大事で、遺跡に対する歴史的・考古学的理解の問題もあり、外国人である私が日本の発掘現場に参加することに負担を感じていました。しかし実際には、研究員の方々のおかげで困難を感じることはありませんでした。

甘樫丘東麓遺跡では、現場での調査内容とともに遺跡の歴史的背景を大変興味深く感じました。絶対権力を誇った蘇我氏に関連する遺跡であり、発掘現場で見える遺構と遺物一つ一つに飛鳥時代の痕跡を探そうとしていました。平城京跡の発掘現場は、平城宮の造営過程を推論できる遺跡であり、これも意味深いものでした。遺跡を体感しながら日本の古代文化への理解を一步進めることができ、また奈文研の歴史にふさわしく堅固に体系化された調査システムを直接体験できたことは、今後の私たちの調査に大きな助けになると思います。

滞在中、二度の発掘調査現地説明会がありました。ともに悪天候にもかかわらず、数百名の一般の方々が現場に訪れたこと、また悪条件に屈せず準備する奈文研の職員の方々の姿に驚きを禁じ得ませんでした。その他にも、資料調査と埋蔵文化財研修への参加など、様々な活動に参加できました。現地での生活に不便のないよう、様々なご配慮を下さった奈文研の方々に心から感謝します。

(現・国立羅州文化財研究所 権 宅章)

(日本語訳：都城発掘調査部 庄田 慎矢)



所内での講演会の様子